

藤原宮跡・京跡出土の道具瓦

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1992年度に行った調査あるいは整理作業で見出した特殊な瓦について報告する。

藤原宮第27次調査(東面中門調査)出土丸瓦

1979年に行った藤原宮第27次調査では、宮東面大垣の内と外にある濠から大量の瓦が出土した。

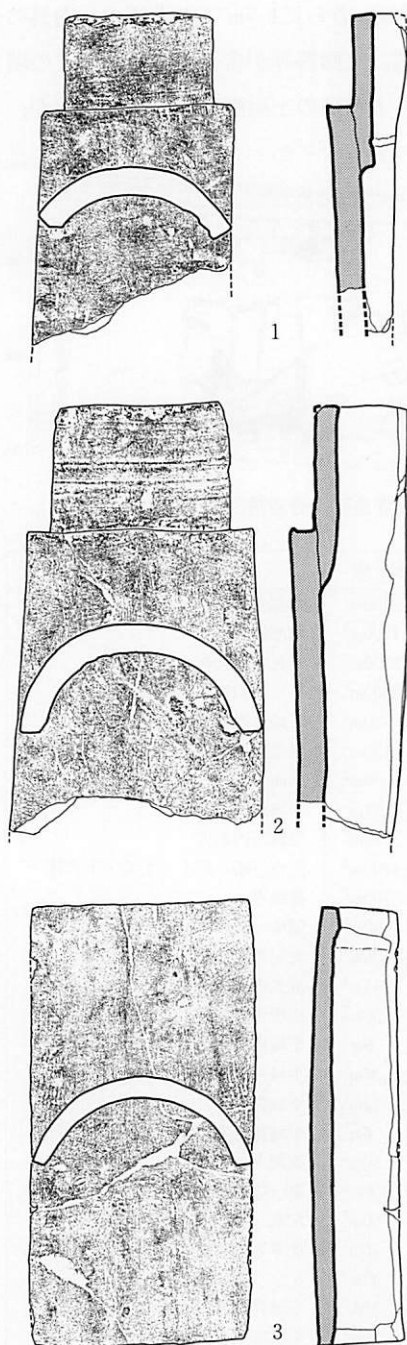
1はそのなかの一点。現存長26.2cm，玉縁長7.3cmの一見普通の丸瓦である。しかし、通常の丸瓦(2)が模骨に巻いた粘土円筒を二分分割して形成するのに対し、1は三分割して弧の浅い細い丸瓦とする。通常の丸瓦と一緒に使用できないことは確かだが、その用途は明らかではない。

1と2は、丸瓦部と玉縁部を各々別の粘土板で成形する技法が共通する。胎土、焼成等から判断して、これらは藤原宮瓦のGグループ(『飛鳥藤原学報Ⅱ』)に属す。さらに1には、玉縁部の布をしぼった紐の圧痕がある。これもGグループの丸瓦に観察できる(大脇1992)。玉縁部の紐圧痕は、法隆寺西院伽藍や川原寺の丸瓦にも認められる技法である。

雷丘北方遺跡第3次調査(藤原京左京十一一条三坊)出土丸瓦

3はほぼ完形の丸瓦。全長33.6cm，幅17.5cm。丸瓦の玉縁部が欠損したかに見えるが、玉縁段部の凹面をヘラケズリで調整するので、もともと玉縁部は作られていない。玉縁部のヘラケズリは、筒部先端と同じく端で深くなっている。これは、両方に玉縁部を差し込むための工夫であろうか。粘土板巻き付け作りで、凸面にはかすかに縦位縄叩き目が残る。

雷丘北方遺跡では主殿のほか東西脇殿などがみつがっているが、いずれも掘立柱建物である。出土した瓦の総量からしてこれらの建物は瓦葺きではなく、せいぜい棟部分にだけ瓦を用いた屋根だったろう。この丸瓦もその一部を構成する道具瓦と考える。



瓦実測図(1:6)

藤原宮第70次調査（内裏南西隅の調査）出土有段平瓦

4は藤原宮第70次調査で南北溝SD1680から出土した平瓦。現存長32.8cm、現存幅18.6cm。軒平瓦のように広端から19cmところに、高さ0.8～1.1cmの低い段を作るが、広端面に紋様はない。段部は幅7～8cmの範囲だけに粘土を貼り足して作る。凸面は縦位縄叩き目をヨコナデで消すが、段部のナデは弱く縄叩き目が残る。粘土板巻き付け作りである。

これと全く同様の平瓦が平城宮跡でも出土している（5）。この瓦は平城宮跡第20次調査（平城宮内裏北外郭）の斜行溝SD2110から出土した。全長38.6cm、広端幅25.7cm、狭端幅23.5cmある。段部は長さ16cm、高さ0.8～1.0cmあり、段部全面ではなく段近くにだけ粘土を貼り足す。縦位縄叩きの粘土板桶巻き作り。製作技法だけでなく、胎土や焼成も4とほとんど同じなので、平城遷都に際して藤原宮から持ち込まれた瓦であることが判明した。

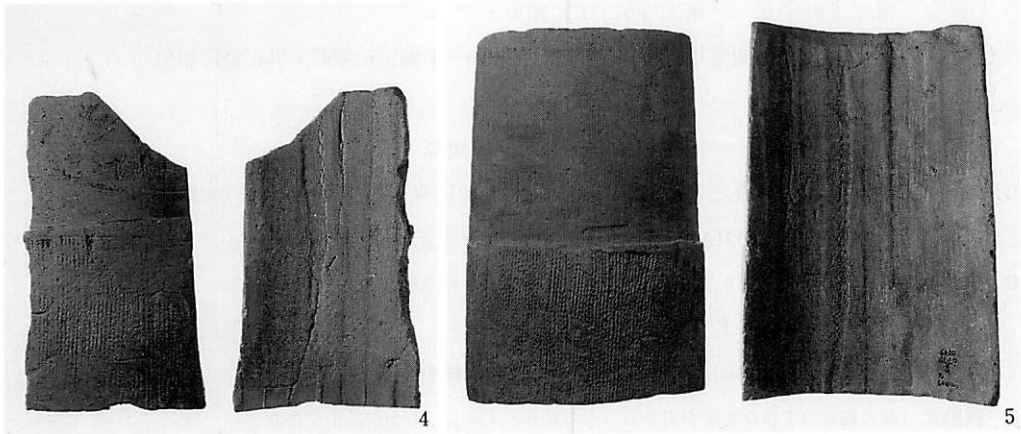
さて、4・5とほとんど同じ瓦が平安京南効の鳥羽離宮跡にある白河天皇成菩提院陵や、鴨東の尊勝寺跡からも出土している。いずれも11世紀から12世紀初め頃の播磨産の瓦と推定され、鳥羽離宮では側縁に一定間隔で段を作った丸瓦や軒丸瓦と共伴することから、平瓦凸面の段は瓦のずり落ちを防止する工夫と考えられている（鈴木1989）。

一方、藤原宮ではこの種の有段平瓦は今回紹介するものが初例であり、量的に軒平瓦とみあわない。この瓦が内裏外郭堀の西南隅から出土したことから、鳥羽離宮のような使用法ではなく、入り隅の谷に用いられた谷樋瓦（たにどいがわら）と考えられる。入り隅の谷はほかより勾配が緩くなる。凸面にもうけられた段部はそれに対処する工夫とみるのである。（花谷 浩）

〈参考文献〉

大脇 潔 1992 「丸瓦の製作技術」〔研究論集Ⅹ〕奈良国立文化財研究所学報第49冊 奈良国立文化財研究所)

鈴木久夫 1989 「鳥羽離宮の瓦」(廣田長三郎編『古瓦図考』ミネルヴァ書房)



谷樋瓦（4：藤原宮跡出土，5：平城宮跡出土）